
シンポジウム 1

ラパロ・ロボット時代に開腹手術をどう指導するか

座 長 武 中 篤 (鳥取大学医学部 器官制御外科学講座 腎泌尿器学分野)
中 村 元 信 (国立病院機構九州がんセンター 泌尿器・後腹膜腫瘍科)

司会のことば

泌尿器科領域では腹腔鏡手術、ロボット支援手術がいち早く導入され、標準手術として普及してからはかなりの年月が経過しているが、「ラパロ・ロボット時代に開腹手術をどう指導するか」については実効性のある標準的な方法が未だに確立はされていないように思われる。また、このテーマは早くから問題視されていたが、腹腔鏡手術、ロボット支援手術の手術手技や機器が発達、成熟したことにより、これらの手術が普及し始めた当時と現在では、この問題に対する認識にも変化が生じているようにも感じられる。開腹手術の経験が豊富な術者が今後さらに減少するのは間違いなく、まさしく喫緊の課題である。

本シンポジウムにて、まず川崎医科大学 宮地禎幸先生より若手泌尿器科医師の開腹手術に対する意識調査の興味深い結果についてご報告いただいた。8割以上の医師が開腹手術に自信がないと回答し、7割以上の医師が、今後医学が進歩しても開腹手術は必要な治療として存続すると考えているとの結果であった。

長崎大学 今村亮一先生からは、腎移植術は開腹手技や後腹膜腔展開、血管剥離・縫合操作、尿管膀胱吻合など他の開腹手術に応用できる手技が多く含まれ、開放手術教育に有用であることを症例を交えてご講演いただいた。開腹手術における術前ディスカッションの教育効果についても言及された。

愛媛大学 宮内勇貴先生からも、腎移植術の指導を段階的に行う開腹手術教育の具体的な方法についてご提示いただいた。また、愛媛大学病院で行われている CST

(cadaver surgical training) を紹介された。若手泌尿器科医師の2/3がその受講を希望しており、9割が定型的な開腹手術は習得したいと考えているとのアンケート結果も示された。

宮崎大学 澤田篤郎先生は、術野の俯瞰的な観察や面で剥離する感覚、適切なトラクションの感覚のつかみやすき等の開腹手術の利点を示され、腹腔鏡手術の上達にも役立つことを解説された。宮崎県の医療体制も踏まえて、若手医師に対して積極的に開腹手術やそのトレーニングの機会を提供している現状も示された。

聖路加国際病院 新保正貴先生は、開腹手術で習得すべきポイントとして術野展開、止血・血管縫合技術、触覚の経験・認識について解説された。高難度な開腹手術の対処法として体腔鏡手術が有利な操作を先行した上での開腹手術への移行などの方法を挙げられ、開腹手術に腹腔鏡手術の器具を利用するなどの開腹手術のハードルを下げる工夫についても説明された。

ラパロ・ロボット時代における開腹手術の教育・指導にはまだ課題が多いことも示されたが、腎移植術などの開腹手術を貴重な教育の機会と捉えて各施設で工夫を凝らしながら教育を行っている現状が演者の先生方のご講演より明らかとなった。施設ごとの取り組みに加え、開放手術症例が多い近隣の医療機関との連携による教育や、開放手術の CST を教育システムとして確立させる必要性についての発言もあった。

医師個人の意識・意欲だけでなく、施設や地域、さらには学会としてこの問題に取り組む必要性・重要性があらためて明らかとなり、意義深いシンポジウムになったのではないかと考えている。